第 13 回「全国日本語俳句コンテスト」選評

下岡友加 先生

「題詠」

第一席「一山の雨載せてトンボ低く飛ぶ」。蜻蛉は低く真直ぐに飛ぶことがある。それを「雨を載せて」と把握した点に強い詩情が感じられた。しかも「一山の雨」である。この構図により、小さな虫であるはずの蜻蛉の生命力が大きなものとして浮かび上がってくる。大胆な見立ての成功した句として評価したい。

第二席「甘蔗伸ぶ父の背よりもまっすぐに」。黄霊芝『台湾俳句歳時記』「甘蔗」に収録された例句は、甘蔗を刈る、或いは甘蔗を売る景を詠んだものが多い。対して、この句は甘蔗の生育の姿を詠む。しかも、その真っ直ぐに伸びた姿を父と比較している点から、甘蔗を栽培している働き者の父の姿も思い浮かぶ。すくすくと育つ植物とそこで逞しく働いている（しかし、もしかすると、老い始めているのかもしれない）父と。両者を一つの構図に収めた作者の確かな目が感じられる句である。

第三席「蜻蛉飛ぶあの頃ぼくらはだしだった」。句の後半部は児童文学の書名を想起させるが、そのフレーズを作品の一部としてあえて取り込み、散文過去形で纏めることで、郷愁をより効果的に際立たせている点を評価した。「あの頃」の仲間は既に離散し、現在は各々の暮らしをしているのだろうか。「tonbotobu anokorobokurahadashidatta」と o 音と a 音の繰り返しによる整調の工夫も見られる句である。

「雑詠」

第一席「タンポポは土のぬくもり知りて咲く」。温かい句である。タンポポという素朴で可憐、土と密接に低い場所で咲く花の特徴を的確に捉えている。どこにでも生えている、いわば庶民的な春の草花であるタンポポの優しさを、誰もが再認識できる句として評価した。

第二席「白ウサギ雪を跳ねては雪を見る」。兎が雪の中で跳ねては立ち止まる、その特徴的な動きを描写した句。台湾において、このような風景が日常的に見られるとは思われない。映像を見て作られた句であろうか。兎の白と雪の白による、美しい絵画のような世界を端的な言葉で見事に表現した。

第三席「冬晴れの光を吸って眠る猫」。陽だまりの中で眠る猫を「光を吸って」と把握した。すやすやと眠る猫の様子が目に見えるような気持ちのよい良句である。